



視 点

「祝・会報400号」

編集局の皆さん、ありがとう！

「会員の皆様、お久しぶりです」というより「初めまして」の方が多いかもかもしれませんね。

私が性教協に入会したのは、1983年夏の第2回大会からです。

その前年に私が出版した「16歳の母」を読んで下さった佐藤明子さん（前々編集局長）から大会のレポート報告を依頼され、会員にならないとレポート報告ができないからと入会を誘われたのがきっかけでした。うまく明子さんに乗せられた感じでしたが、大会に参加して「人間の性」についてもっともっと勉強したいという思いを強くし、性教協の活動に加わっていきました。

そして翌年1984年には幹事の指名を受け、退任する2008年までほとんど編集局に属して活動してきました。

年間10号の会報を定期的に発行する作業は大変でした。皆それぞれの仕事が忙しい中、原稿依頼、インタビュー、割り付け、校正などに追われ、予定通りに発行できるか毎回ハラハラでした。でも職場の枠を超えて、編集局の仲間たちとの討論や共同作業はワクワクして楽しかった思い出がいっぱいです。特に私は、会員内外の幅広い方々から直接話を聞くことができるインタビューが好きでした。

貴志泉さんや鈴木正弘さんという名編集局長の下で気楽に活動していた私でしたが、2004年に編集局長の役が巡ってきたのです。すでに編集作業がデジタル化へと進み始めていた時期でしたが、私はパソコンをうまく使いこなすことができなかったので大慌てでノートパソコンを購入、メールで原稿を受信、送信することから始め、パソコンに慣れながら作業を進めていきました。

校正ミスは何回もあったものの、担当した201号から240号までの3年間、予定の期日に会報を発行できたことで、編集局長としての最低限の責任は果たせたかなと思っています。

母と夫のダブル介護と自らの病気が重なり、幹事の役を退任し、編集局長を辞任することとなったと

き、後任を引き受けてくれたのも佐藤明子さんでした。

退任後は会報の作り手から専ら読む側になり、編集局の皆さんの相変わらずの奮闘を、ご苦労様という気持ちで読ませていただいています。会報が届くと直ぐに1ページ目の「視点」と最後のページの「編集後記」を読みます。そしてあとは時間の余裕のある時に他のページを読んでいきます。現在は会報を読んでいるだけの会員になっていますが、性教育やセクシュアリティをめぐる現状や全国のサークルなどの状況などが分かり、性教協の会員としての仲間意識は継続しているつもりです。

性教協の設立以来の理念である「科学、人権、自立、共生」をもとに、さらにアップデートした「包括的性教育」をキーワードにして、その理念を深め、実践を作り出そうとしていることに、性教協が「人間と性」の研究団体としてたゆみない発展を続けていることを感じます。

そして実践の場は学校だけでなく、医療現場や地域、家庭など多方面に広がり、全国各地にさまざまなサークルが誕生し、性教協が研究と同時に運動の両面で発展していることが分かります。

「祝・会報300号」を書いたと思ったら、あっという間に「祝・会報400号」になってしまいました。その間に縦書きから横書きへ、B5版からA4版へとリニューアルされて内容もますます充実しています。その陰には編集局長をはじめとした編集局の皆さんのご尽力があったものと心から感謝です。

今後とも全国の会員をつなぎ、共に刺激しあいながら新たな実践を生み出していく情報源としての会報になりますように願っています。



原田 瑠美子
(元編集局長 2004年～2008年)